

# フランス語とスペイン語における主語の倒置\*

寺崎 英 樹

フランス語とスペイン語の語順に関する対照研究の一環として主語倒置について調査するため、フランス語テキスト A. Saint-Exupery, *Le Petit Prince* (1946) とスペイン語訳テキスト B. del Carril, *El Principito* (1951) を資料としてその頻度、それが生じる環境、およびその機能について考察した。広い意味での主語倒置はフランス語の方が多いが、その理由はフランス語の主語接語倒置の多くがスペイン語では主語代名詞非明示の構文に置き換えられるからである。両言語とも主語倒置は無標の倒置と有標の倒置に分けられる。前者は心理動詞等の主語後置構文と外置主語を持つ連結動詞の構文に該当する。後者は常用的倒置と臨時的倒置に分けることができる。臨時的倒置は情動的または文体的要因によって引き起こされ、その頻度はスペイン語の方がフランス語よりも高い。これに対しフランス語は主語前置の語順を維持しようとする制約がより強く働く。

キーワード：主語、倒置、語順、スペイン語、フランス語

## 1. 序

### 1.1. 目的

スペイン語の語順に関して拙著（寺崎，1998：162）では「類型論的には同じ SVO 型の言語ではあると言っても英語・フランス語に比べると、スペイン語の句の配列順は固定的ではなく、かなりの自由がある。」と述べたが、これに対しフランス語学専攻のある大学教授から私信でコメントを頂いた。それは、英語に比べればフランス語もロマンス語である以上、動詞変化が重要な要素であり、それゆえに語順はかなり自由な言語であるという御指摘であった。つまり、英語はともかくとして、フランス語はスベ

イン語よりも語順が固定しているとは言えないのではないかという趣旨であると筆者は理解した。拙著では両言語の対照自体が目的ではないので、具体的なデータに基づいて主張を行ったわけではないが、フランス語が他のロマンス語に比べると語順に制約が多いということは一般に認識されていることであると思われる<sup>1)</sup>。そうだとすると、御批判にはある程度資料の裏付けをもってお答えすることが必要であろうと考えているうち諸事に紛れ、今日に至ってしまった。そこで、今回の論考は、改めてスペイン語とフランス語の語順の対比という問題をできるだけ資料に基づきながら観察し、基礎的な考察を行うことにしたものである。

さて、語順の対照を行うにしても比較すべき要素は多岐にわたるので、何を比較するかが問題であるが、一般に文の主要部は述語動詞であると考えられるので、述語動詞を持つ典型的な文を考察対象とし、動詞と他の文要素との位置関係を取り上げることにした。伝統的な文法観に従えば、スペイン語でもフランス語でも典型的な文構造は主語と述語という2要素を持つ二肢文 (*oración bimembre*) であるから、小論では動詞に対する主語の位置という問題に視点を絞りたい。両言語とも述語動詞 (定形動詞) が現れる文では「主語 (S)+定形動詞 (V)」という配列が基本語順 (*orden canónico*) と考えられるので、その語順が破られる「定形動詞 (V)+主語 (S)」という配列をここではすべて倒置と見なすことにする。そして、この主語倒置 (*inversión del sujeto*) の問題に限って両言語ではその頻度にどのような相違があり、またその出現する環境にはどのような相違があるのか、実際のテキストを比較しながら検討する。

## 1.2. 資料

フランス語とスペイン語を対比させるに際してはできるだけ同質の資料を選択することが望ましいと考える。そこで、できるだけ同じジャンル、同じ文体のテキストを対比するという意図からフランス語の原文テキストとそのスペイン語訳のテキストを使用することとした。資料としたテキストはサンテグジュペリの『星の王子様』の原文とそのスペイン語訳である (Saint-Exupéry, 1999; 1976)。この作品は特に意図を持って取り上げたわけではないが、選んだ一つの理由は童話の形式をとっていて会話文が多く、語彙・構文も平易なので、文体に工夫を凝らした作品に比べれば文学作品とは言っても日常的なフランス語の特徴をより反映しているのではないかと思われることにある。本作品はフランス語の原作では100ページ足らず

で資料としては小規模であり、これだけをもって大胆な結論を引き出すことはできないが、印象論の域に留まらない推論を行うことは可能であると考える。

### 1.3. 検討する問題点

上記の資料について具体的に検討しようとする問題点は次のとおりである。

- 1) フランス語とスペイン語において主語の倒置はどのくらい頻度の相違があるか。
- 2) フランス語ではどのような環境（文脈）で倒置が起きるか。
- 3) スペイン語ではどのような環境で倒置が起きるか。
- 4) フランス語では倒置しないのにスペイン語で倒置するのはどういう場合か。
- 5) 逆に、フランス語で倒置するのにスペイン語では倒置しないのはどういう場合か。
- 6) 二つの言語で倒置はどのような機能を果たしているか。

なお、主語倒置は何が引き金となり、どのようなプロセスを経て生じるかということも問題となり得る。変形文法的アプローチは、この問題に集中している<sup>2)</sup>。しかし、この問題は小論の主要な目的から外れるので、最小限関わりがある範囲で言及するにとどめたい。

### 1.4. 主語および倒置について

主語の倒置を論ずる以上、主語および倒置という概念をまず規定しておく必要がある。ここで扱う主語 (*sujeto*) とは、定形動詞に人称・数の一致を引き起こす文要素、すなわち顕在的または明示的な文法的主語のことである。主語は語、句、節のいずれでもあり得る。語の場合、自立語でも付属語でもあり得るが、動詞の人称語尾のような接辞は主語とは認められない。フランス語の主格代名詞、たとえば“*Je chante.*”という文の *je* は接語形式 (*clítico*)、つまり付属語であり、ここで言う文要素としての主語であるが、語尾の *-e* は屈折接辞であって、主語の資格は持たない。一方、スペイン語の文“*Yo canto.*”の主格代名詞 *yo* は自立語であり、当然に主語である。しかし、“*Canto.*”という文の場合、人称語尾 *-o* は陰在的主語 (*sujeto implícito*) として *yo* が存在することは表示するが、フランス語の

-e と同様、屈折接辞であって主語の資格は持たない、すなわち、この文は有主語文ではあるが、顕在的主語 (*sujeto explícito*)、または語彙的主語 (*sujeto léxico*) は存在しない。つまり、ここで考察対象とする主語の資格を持つ要素は存在しないことになる。

次に、倒置に関しては、小論では定形動詞よりも後に主語がある場合を一律に主語倒置と見なす。主節・従属節のどちらも考察対象とするが、不定形動詞（不定詞・現在分詞・過去分詞）の構文は考察から除外する。倒置という用語は、SV という配列順が主語の「正置」であることを前提とし、それから逸脱していることを示唆するものである。しかし、筆者はSV の語順が言語に普遍的なものであるとか、基底の語順であるなどという立場はとらない。ただ、スペイン語の定形動詞構文では全般にSV の配列順の頻度が高いという意味でこれが基本語順であることは認めて差し支えないと考える。しかし、スペイン語には *gustar* のような心理動詞など一連の動詞グループでVS の語順を無標の配列としてとるものがあり、それがむしろ正常語順 (*orden regular*) であると言える。しかし、ここでは一般の動詞の正常語順 (SV) から逸脱した倒置による VS 語順も一定の種類動詞が正常語順としてとる VS 語順もすべて広い意味で主語倒置として扱うことにする。

さて、スペイン語の場合、主語倒置を認定するのは容易である。倒置とは定形動詞の後に文法的主語である名詞句、不定詞あるいは名詞節のいずれかが現れた場合であると規定できる。しかし、フランス語の場合はそう簡単ではない。フランス語文法では一般に主語の倒置に関して単純倒置 (*inversion simple*) と複合倒置 (*inversion complexe*) という区別がなされる。単純倒置とは、主語の名詞・代名詞が動詞の後に来る VS 型の構造 (1) である。一方、複合倒置とは、主語の名詞が動詞の前にあるが、それと同一指示の主格代名詞 (*pro*) が動詞後に現れる SV-*pro* 型の構造 (2) である<sup>3)</sup>。

- (1) a. *Arriva-t-il.* [Llegó él.]  
 b. *Arriva son père.* [Llegó su padre.]  
 (2) *Son père arriva-t-il.* [Llegó su padre.]

これについて単純倒置はもとより複合倒置も主語倒置と見なす。ちなみに、スペイン語ではフランス語で言う単純倒置しか存在しない。

ところで、フランス語には形式上の主語（見かけの主語 *sujet apparent* または文法的主語 *sujet grammatical*）と意味上の主語（実主語 *sujet réel* または論理的主語 *sujet logique*）が共存する構文がある。その一つの類型は、主語が外置 (*extraposición*) された構文である。たとえば、今回のテキストに次のような例がある<sup>4)</sup>。

- (3) Il est bien plus difficile de se juger soi-même que de juger autrui.  
(10, 45) [Es mucho más difícil juzgarse a sí mismo que juzgar a los demás. (10, 54)]

古典的な変形文法理論に従えば、この類型は主語の不定詞または名詞節が文末に移動し、本来の主語の位置には代名詞 *il* が残る構文である。

別の類型としては、指示代名詞 *ce* が形式上の主語となり、論理的主語が文末に配置される構文がある。

- (4) C'est tellement mystérieux, le pays des larmes ! (7, 34) [iEs tan misterioso el país de las lágrimas! (7, 37)]

この型は、同じく古典的な変形文法理論に従えば、主語が右方転位 (*right dislocation, desplazamiento a la derecha*) した構文である。すなわち、主語が元の位置から右方に移動し、元の主語の位置には代名詞 *ce* が出現した構文ということになる。このようなプロセスを理論的に認めるかどうかは別として、これらの構文は文法的主語の *il* または *ce* が論理的主語と動詞を挟んで左右に並立する *pro V S* 型の構造をとる。このようにいわば二重の主語表示が生じるのは、フランス語は変形文法理論で言う「非代名詞主語省略言語 (*non-pro-drop language*)」であるからで、動詞前の位置に実質的であれ、形式的であれ主語がなければならないという文法的制約による。これに対し、「代名詞主語省略言語」または「空主語言語 (*null-subject language*)」であるスペイン語ではそのような制約がないので、該当する構文はいずれも *VS* 型の単純な倒置構文になる<sup>5)</sup>。この種の倒置は、スペイン語では一定の動詞グループが無標の正常語順として構成するものであり、寺崎 (1998) では主語後置構文と呼んだ。しかし、小論では前述のとおり、一般の動詞が *SV* の正常語順から逸脱して構成する有標の倒置と区別せず、

これらも一律に広い意味での倒置として扱う。こうしたいわゆる「空主語言語」特有の構文を持つスペイン語と類型論的に相違するフランス語をできるだけ「公正に」比較をする上から、フランス語の前記構文もやはり倒置と見なすことにする。したがって、スペイン語で主語倒置と認められるのは次の (5a) の場合だけであるが、フランス語の場合は (5b) 複合倒置および (5c) 外置または右方転位の構文も主語倒置に含めることにする<sup>9)</sup>。

- (5) a. V S
- b. S V Pro
- c. Pro V S

## 2. 調査結果とその分析

### 2.1. フランス語の倒置

前記の規定に基づき主語倒置と認めた事例数をフランス語・スペイン語のそれぞれについてまとめたものが末尾に付した表 (1-2) である。主語倒置と関わりを持つと考えられる環境または文脈により分類した。両言語で対応する環境は同じ番号で示す。

### 2.2. 主語倒置の頻度

資料に基づき最初に挙げた問題点に順次検討を加える。最初に、1) フランス語とスペイン語において主語の倒置はどのくらい頻度の相違があるかという問題である。表 (1-2) に示すとおり、前記 (5) の類型をすべて主語倒置と認める限りフランス語はスペイン語以上に主語倒置がよく出現すると言える (346 対 317)。ただし、文法的主語であれ、論理的主語であれ、動詞前に主語要素のある構文をもし主語倒置から除外すれば、フランス語の [1b] 複合倒置, [11] *c'est* および [12] *il* 構文の場合は除外されてしまうので、スペイン語の方が倒置が多いことになる (288 対 317)。要は主語倒置の定義次第である。結局、フランス語はできるだけ SV の固定的語順を崩さないまま主語倒置の機能を果たさせるための定型的な表現手段が発達していると言えるだろう。さらに、両言語の倒置の内訳を見ると、いろいろな問題点や相違点に気づく。

### 2.2. フランス語で倒置が起きる場合

次に、2) フランス語ではどういう環境で倒置が起きるのかという問題を検討する。フランス語の内訳の中でもっとも目立つのはフランス語文法で

[3] 挿入節 (*proposition incise, cláusula incisa*) と呼ばれる文脈である (216 例, 全体の 62.4 %)。これは被伝達節 (*oración informada*) を導入する伝達節 (*oración informante*)、つまり直接話法に付されたト書きの部分である。この場合フランス語で頻繁に現れる動詞は *dire* (*decir*), *répondre* (*responder*), *faire* (*decir*), *demander* (*preguntar*), *répéter* (*repetir*), *ajouter* (*agregar*) など。

- (6) —Oui, fis-je modestement. (3, 19) [—Sí—dije modestamente. (3, 16)]
- (7) —N'est pas, répondit doucement la fleur. (8, 35) [—¿Verdad?—respondió suavemente la flor—. (8, 40)]

今回の資料は会話文の多い文学作品であるため、必然的に伝達節が多く、倒置の頻度も高くなったと言える。スペイン語でも伝達節の倒置の事例は過半数を占める。直接話法の被伝達節を導く伝達節は、被伝達節の前に来る場合を除いて主語倒置を行うのがフランス語でもスペイン語でも通常であると言える。ただし、フランス語に比べれば、スペイン語の伝達節で倒置の数が少ないのは、フランス語で代名詞主語の倒置が起きる場合、対応するスペイン語では代名詞主語の陰在 (いわゆる代名詞主語省略) が原則であるため、主語倒置が起きないからである (上記 (6) の対訳参照)。このような両言語の統語的特徴の相違がフランス語の倒置を多く見せている主要な原因の一つである。

伝達節について倒置例が多いのは [1] 疑問文である。単純倒置 (8-9) と複合倒置 (10-11) を併せて 64 例 (全体の 18.5%) ある。その大部分は疑問詞を持つ部分疑問文である。疑問詞のない全体疑問文は単純倒置では 2 例 (8), 複合倒置では 1 例 (11) にすぎない。なお, *c'est ... ?* 型の疑問文は [11] *c'est* の構文に含め、ここには入れていない。

- (8) Crois-tu qu'il faille beaucoup d'herbe à ce mouton ? (2, 18) [¿Crees que necesitará mucha hierba este cordero? (2, 15)]
- (9) De quelle planiète es-tu ? (3, 20) [¿De qué planeta eres? (3, 16)]
- (10) “Pourquoi un chapeau ferait-il peur ?” (1, 13) [“¿Por qué habrá de asustar un sombrero?” (1, 8)]
- (11) “Le mouton oui ou non a-t-il mangé la fleur ?” (27, 97) [[...] ¿el

cordero, sí o no, ha comido a la flor? (27, 126)]

疑問文の次に数が多いのは [12] 非人称の *il* を持つ構文で (12-13), 35 例ある (全体の 10.1%)。その中でも特に目立つのは *falloir* の構文 (12) で, 過半数 (17 例) を占める。

(12) *Il foudrait les mettre les uns sur les autre...* (5, 26) [Habría que ponerlos unos sobre otros... (5, 26)]

(13=3) *Il est bien plus difficile de se juger soi-même que de juger autrui.* (10, 45) [Es mucho más difícil juzgarse a sí mismo que juzgar a los demás. (10, 54)]

ちなみに, フランス語の *falloir* に相当する表現はスペイン語では *hay que* のような非人称構文 (無主語文) のほか, *necesitar*, *tener que*, *deber* のような人を主語とする人称構文 (有主語文) および *ser necesario* 型の主語後置文など多様に訳されている。最後の場合を除き主語倒置の構文にはならない。

*falloir* 以外の動詞で *il* 構文を構成するのは *être A* (属詞) *que / de inf.* (*ser A que / inf.*), *suffir* (*bastar*), *arriver* (*ocurrir*), *exister* (*existir*), *passer* (*pasar*), *paraître* (*parecer*), *sembler* (*parecer*) である。

3 番目に数が多いのは同じく [11] 形式的主語 *ce* を持つ *c'est A que / de inf. / 名詞・代名詞* の構文 (14-15) で, 13 例ある (全体の 3.8%)。

(14) *C'est vrai que, là-dessus, tu ne peux pas venir de bien loin...* (3, 20) [Verdad es que, en esto, no puedes haber venido de muy lejos... (3, 16)]

(15) *Et ce n'est pas sérieux de chercher à comprendre pourquoi elles se donnent tant de mal pour se fabriquer des épines qui ne servent jamais à rien ?* (7, 33) [¿Y no es serio intentar comprender por qué las flores se esfuerzan tanto en fabricar espinas que no sirven nunca para nada? (7, 35)]

これ以下の事例は出現回数が非常に少なくなる。フランス語では時・場

所を表す付加語（状況補語）が文頭に来ると、特に自動詞・代名動詞は主語倒置が起きるとされる（朝倉，1955: 351; 佐藤，1991: 377）。実際に、今回の資料で上記の例に次いで多いのは，[7] 付加語が文頭に現れる自動詞文の 6 例である (16-17)。

- (16) D'abord venait le tour des allumeurs de réverbères de Nouvelle-Zélande et d'Australie. (16, 62) [Primero era el turno de los faroleros de Nueva Zelanda y de Australia. (16, 78)]
- (17) Le lendement revint le petit prince. (21, 73) [Al día siguiente volvió el principito. (21, 97)]

筆者（寺崎，1987）はスペイン語の自動詞文では「Am（場面設定要素）VS」の語順が常用文型として頻繁に用いられると述べた。フランス語でも同様に時間・場所などを表す副詞句，つまり筆者の用語では場面設定要素（ambientador）が文頭に現れると，それが主語倒置の引き金，誘因になっていると見られる。

フランス語の従属節で主語倒置が起きやすいとされる場合の一つは関係節である（朝倉，1955: 352）。しかし，今回の資料では [3] 関係節での倒置は 1 例のみ (18) である。スペイン語でも関係節の 1 例は同じ文に対応する。

- (18) J'ai de sérieuses raisons de croire que la planète d'où venait le petit prince est l'astroïde B612. (4, 23) [Tengo serias razones para creer que el planeta de donde venía el principito es el astroide B612. (4, 20)]

同じく従属節の事例で時・比較の接続詞が先行する場合も主語倒置が起きやすいとされる (ibid.)。これに該当すると思われるのは [6a] 従属節の自動詞の 1 例 (19) で接続詞 *comme* に導かれる。

- (19) Il tomba doucement comme tombe un arbre. (26, 95) [Cayó suavemente como cae un árbol. (26, 123)]

さらに、時・場所以外の一定の副詞句の中にも主語倒置を引き起こしやすいとされるものがある (ibid.)。次に示す [8] 副詞句 + 他動詞の 2 例 (20-21) は文頭の副詞句 *ainsi*, *au moins* がそれぞれ倒置の誘因になったと考えられる。

- (20) *Ainsi l'avait-elle bien vite tourmenté par sa vanité un peu ombrageuse.* (8, 36) [*Así lo atormentó bien pronto con su vanidad un poco sombría.* (8, 41)]
- (21) *Au moins son travail a-t-il un sens.* (14, 53) [*Por lo menos su trabajo tiene sentido.* (14, 67)]

以上とは逆に、資料中には主語倒置が普通は起きないとされている場合に倒置している例がある。[2] 間接疑問節と [4] 感嘆文の各 3 例である。それぞれ 2 例ずつ示す (22-25)。ここに示していない例も含めて、いずれも疑問詞が先行する点が共通している。

- (22) —*C'est un savant qui connaît où se trouvent les mers, les fleuves, les villes, les montagnes et les déserts.* (15, 57) [—*Es un sabio que conoce dónde se encuentran los mares, los ríos, las ciudades, las montañas y los desiertos.* (15, 72)]
- (23) *Tu verras où commence ma trace dans le sable.* (26, 88) [*Verás dónde comienza mi rastro en la arena.* (26, 114)]
- (24) “*Mais où veux-tu qu'il aille !* (3, 22) [—*Pero, ¿adónde quieres que vaya?* (3, 17)]
- (25) “*Comment peut-il me reconnaître puisqu'il ne m'a encore jamais vu !*” (10, 41) [—*¿Cómo puede reconocerme si nunca me ha visto antes?* (10, 48)]

一般に疑問詞を含む間接疑問節や感嘆文では主語倒置が起きないとされる (佐藤他, 1991: 422)。ただし, (22-23) の間接疑問節は主語倒置が起きやすくとされる諸条件, すなわち主語が名詞, 疑問詞が *où*, 述語が自動詞 (とそれに準ずる代名動詞) であることなどを満たしているので倒置が起きたと考えられる。

一方、感嘆文の3例は、スペイン語ではすべて疑問文に訳されており、疑問文のニュアンスが強いと訳者は判断したようである。しかし、フランス語では感嘆文であると見る限り、倒置を引き起こす決定的な文法的要因はないと思われるので、他の要因で倒置が生じたと見なしてよいだろう。なお、ここで感嘆文に分類した例以外に感嘆文と見なされる *c'est ... !* の型が2例あるが、これは [11] *c'est* 構文に含めた。

この他にも、主語倒置を引き起こす特別な文法的要因がないと考えられるのに倒置が起きている事例がわずかながら存在する。それは [9] 主節の自動詞の2例 (26-27) である。

(26) Et gronda, en sens inverse, un second rapide illuminé. (22, 78) [Y un segundo rápido iluminado rugió, en sentido invero. (22, 101)]

(27) Et gronda le tonnerre d'un troisième rapide illuminé. (22, 79) [Y rugió el trueno de un tercer rápido iluminado. (22, 102)]

この2例は文頭に付加語もなく、そこに現れる動詞 *gronder* (*rugir*) は、筆者 (1998) が提示動詞 (*verbo presentativo*) と呼ぶ範疇に属する自動詞ではなく、またいわゆる非対格動詞 (*verbo inacusativo*) でもない<sup>8)</sup>。つまり、VS 語順をとりやすい動詞のグループには属さない。

結局、疑問文のような文の類型を示すための倒置および副詞類 (*adverbial*) など特定の文頭要素の存在により引き起こされると考えられる場合を文法的要因による倒置と見なし、それ以外を情報的あるいは文体的な要因による倒置と見なすならば、フランス語で後者に属する事例は以上 [4] と [11] の計5例となる。倒置全体の中では1.4%を占めるにすぎない。

### 2.3. スペイン語で倒置が起きる場合

ここでは3) スペイン語ではどういう環境で倒置が起きるか、および4) フランス語では倒置しないのにスペイン語で倒置するのはどういう場合かという問題を併せて考察する。

フランス語と同様、スペイン語でも [3] 伝達節または挿入節の主語倒置がもっとも多く (176, 全体の 56.7%), [1a] 疑問文でも倒置が多い (33, 同 10.4%)。しかし、疑問文をやや上回るのが [13] *ser* 構文で (34, 同 10.8%), *ser A que / inf.* の構成をとる。これは寺崎 (1988) では「後置主語属詞文」と呼んだ構文で、機能的にはフランス語の [11] *c'est* 構文および

[12] 非人称の *il* 構文に該当する。スペイン語は既述のとおり代名詞主語省略あるいは代名詞非強制言語なので、形式的な主語代名詞は不要であり、主語後置の構文となる。

フランス語と同じ要因で倒置が起きていると見られるのは [11] 付加語(場面設定要素)を文頭に持つ主節の自動詞で 11 例あるが、その大部分は提示動詞または非対格動詞の範疇に属する。たとえば, *venir* (*venir*), *pasar* (*passer*), *suceder* (*arriver*), *aparecer* (*apparaître*) など。

(28) *Entonces apareció el zorro.* (21, 90) [*C'est alors qu'apparut le renard:* (21, 70)]

(29) *Y ahora, por cierto, han pasado ya seis años...* (27, 124) [*Et maintenant bien sûr, ça fait six ans déjà...* (27, 95)]

フランス語に比べスペイン語で特徴的なのは、倒置の誘因となる付加語などがないにもかかわらず [9] 主節の自動詞で倒置が多数 (24 例) 見られることである。その大部分は寺崎 (1998) で心理動詞 (*verbo sicológico*) および評価動詞 (*verbo de comentario*) と呼んでいるものに該当する。[10] 主節の他動詞で倒置を起こしている例 (8 例) も大部分が同じ種類の動詞である。心理動詞の典型は自動詞の *gustar* (*aimer*) であるが、他動詞では *encantar* (*aimer, enchanter*), *molestar* (*gêner*), *apenar* (*éprouver*), *dar lástima* (*faire pitié*) が現れる。

(30) *Pues no me gusta que se lea mi libro a la ligera.* (4, 24) [*Car je n'aime pas qu'on lise mon livre à la légère.* (4, 24)]

(31) —*Me encantan las puestas de sol.* (6, 31) [*"J'aime bien les couchers de soleil.* (6, 30)]

評価動詞に属するのは自動詞として *bastar* (*suffir*), *importar* (*se moquer*), 他動詞に分類したものとして *hacer falta* (*manquer*) がある。

(32) *Pero sobre tu pequeño planeta te bastaba mover tu silla algunos pasos.* (6, 32) [*Mais, sur ta si petite planète, il te suffisait de tirer ta chaise de quelques pas.* (6, 31)]

(33) Me hace falta ejercicio. (13, 63) [Je manque d'exercice. (13, 50)]

フランス語でこれらの構文に対応するのは人間を主語とする主語正置の構文 (30, 31, 33 の対訳) か, 非人称の *il* 構文 (32 同) である。

フランス語に見られないもう一つの重要な類型は [14] *se* 受動構文で, 主語後置が原則である。18 例ある中で, 15 例までがフランス語原文では不定代名詞 *on* の構文に対応する。

(34) Pero no se sabe nunca dónde encontrarlos. (18, 86) [Mais on ne sait jamais où les trouver. (18, 66)]

(35) Si se trata, por ejemplo, del descubrimiento de una gran montaña, se le exige que traiga grandes piedras. (15, 75) [S'il s'agit par exemple de la découverte d'une grosse montagne, on exige qu'il en rapporte de grosses pierres. (15, 59)]

やはりフランス語に見られない別の類型は [15] 再帰動詞 (代名動詞) の 2 例であるが, いずれも提示動詞のグループに属する *acercarse* (*approcher*), *ocurrirse* (*arriver*) の構文である。

(36) Y cuando se acercó la hora de la partida: [...] (21, 98) [Et quand l'heure du départ fut proche : [...] (21, 74)]

(37) Sin embargo, se me ocurrió preguntar: [...] (25, 112) [Cependant une question me vint : [...] (25, 86)]

スペイン語で疑問文など統語的な理由で主語倒置が要求される場合または心理動詞など主語倒置というよりむしろ主語後置が正常語順である場合を除き, 文法的に特別の要因がないにもかかわらず倒置が行われていると見られる事例を集めると, フランス語よりも数が多い。すなわち, [6b] 主節の他動詞の 2 例 (26), 同じく自動詞の [9f] *rugir* の 1 例, [9e] 存在を表す *estar* の 1 例 (49-50), *ser* 構文の中 [13b] *A ser S* の 4 例, [13c] *ser A S* の 8 例, [13d] *ser* 受動文の 1 例, 計 17 例である。倒置全体の中では 5.3% を占めることになる。

## 2.4. スペイン語で倒置が起きない場合

次に、5) フランス語では倒置するのにスペイン語では倒置しないのはどういう場合かという問題を検討する。この場合の大部分は、フランス語で代名詞主語が倒置している単純倒置の文であり、対応するスペイン語の文では代名詞陰在、つまりいわゆる代名詞省略となるので倒置は生じない(前記(22-25)など参照)。

一方、フランス語で名詞主語を持つ文が倒置を起こしている場合、スペイン語でもほとんど倒置が対応する。しかし、ごくわずかながら例外が4例ある。その中の3例は疑問文でフランス語では複合倒置の事例である。

(38) Alors les épines, à quoi servent-elles ? (7, 31) [—Entonces, las espinas, ¿para qué sirven ? (7, 33)]

(39) “Les épines, à quoi servent-elles ?” (7, 32) [—Las espinas, ¿para qué sirven? (7, 34)]

(40=11) “Le mouton oui ou non a-t-il mangé la fleur ?” (27, 97) [[...] ¿el cordero, sí o no, ha comido a la flor? (27, 126)]

フランス語では疑問文内で動詞の後にあるはずの主語が抜き取られ主題化して文頭位置に移動したため、複合倒置が起きている。一方、スペイン語でも同様な抜き取りによる主題化が起きているが、主語代名詞は非顕在が原則であるから倒置は生じない。

残る1例は前記(26)の例である。この例は、前記のとおりフランス語では文法的要因ではなく、文体的要因で倒置が選択されたと考えられるが、スペイン語でも同じ状況下で逆に倒置が文体的に選択されなかったと言うしかない。作品中で近くにある同じ動詞の例(27)はスペイン語でも倒置文になっている。

## 3. 両言語における主語倒置の機能

最後に、6) 二つの言語で倒置はどのような機能を果たしているかという問題を考察する。ただし、考察の範囲は主に今回の資料に現れた代表例に限り、あらゆる場合を網羅的に論じようとするものではない。

フランス語でもスペイン語でも小論で考察したような広い意味での主語

倒置には無標の倒置と有標の倒置があると考えられる。倒置は正常な語順から逸脱するという意味合いを持つが、無標の倒置構文では主語が動詞後の位置を占めるのが正常語順なので、狭い意味での倒置とは区別して主語後置構文 (*oración con el sujeto pospuesto*) と呼ぶことにする。この構文はさらに (i) 主語が動詞後の位置を占める配列、つまり主語後置が常用語順である動詞グループが作る構文と (ii) 主語後置そのものを表現上の目的とする定型的構文に分かれる。どちらの言語とも (i) を構成するのは心理動詞および評価動詞であり、(ii) を構成するのは連結（繫辞）動詞で、スペイン語では主に *ser* であり<sup>9)</sup>、フランス語では *être* である。それぞれの類型に対しスペイン語では (41)、フランス語では (42) の構成をとる。

(41) i. V S

ii. V A S

(42) i. il V S

ii. ce V A S / il V A S

一般に、文の主語は主題化して文頭に配置されるのが普通であるが、これらの述語の構文では（論理的）主語が意味役割上は動作主ではないという共通点があり、一方でその主語が情報上の焦点となるのが普通であるため、文末に配置される構造をとると考えられる。つまり、情報構造上では主語を非主題化し、焦点化することをその機能とする構文である。

次に、有標の倒置、つまり狭義の倒置には一定の統語的環境により倒置することが普通である場合とそうではない場合があると考えられる。前者を常用的倒置 (*inversión usual*)、後者を臨時的倒置 (*inversión ocasional*) と呼ぶことにする。ただし、常用的とは言っても事例により倒置の頻度にはかなり相違がある。常用的倒置の代表的事例としては次のものがある。表 (1-2) の分類項目の番号と併せて示す。

(1) 部分疑問文（疑問詞のある疑問文）…[1]

(2) 全体疑問文（疑問詞のない疑問文）…[1]

(3) 直接話法の伝達文…[5]

(4) 文頭に場面設定要素（時・場所の副詞類）が存在する自動詞文…[7]

(5) 文頭にその他一定の副詞的要素が存在する文…[8]

(6) 関係節…[3]

(7) 一定の接続詞が先行する従属節…[6]

以上の中、(1) は疑問詞が疑問文の文頭要素となることによって生じることがほぼ義務的となる倒置である。この場合、スペイン語では疑問詞が文頭に位置する（変形文法的に言えば文頭へ移動する）ことも、主語が倒置することも義務的であるが、フランス語ではどちらのプロセスとも必ずしも義務的ではない<sup>10)</sup>。ここにもフランス語ができるだけSV語順を維持しようとする特徴が見てとれる。

これ以下の倒置はより随意的であると言える。(2) は文の機能的類型としてその文が疑問文であることを示すために倒置が行われると考えられる。フランス語でもスペイン語でも、この倒置は義務的ではない。(3) 以下の場合、一定の文頭要素が存在することが倒置の誘因となると考えられる。(3) では文頭に伝達節の全部または一部が配置されることによって倒置が引き起こされる。まず発言内容を提示し、その後で発言者である主語を置くという語順をとるもので、倒置は主語に焦点を合わせ、明示するという情報的機能を果たしていると考えられる。(4) と (5) は文頭にある一定の副詞類が倒置を引き起こす要因となる。(4) の文頭要素は主に時・場所の副詞類であり、動詞は提示動詞のグループである。両方の要因が競合して倒置を引き起こし、それによって主語の場面への提示、焦点化が行われると考えることができる。(5) ではむしろ文頭の副詞類とその被修飾要素である動詞を接近させることによって緊密な修飾関係を明示することに倒置の主眼があると見られる。(6) と (7) は、文頭要素が関係詞または接続詞の場合である。両方の場合とも倒置は、その現れる環境が文主題を持たない従属節であること、つまり主節に対する従属性を示すことが一つの重要な機能になっていると考えることができる。

臨時的倒置は文の機能的類型を示す目的ではなく、また特定の文頭要素があるためでもなく、倒置が行われる場合である<sup>11)</sup>。純粹に情報的または文体的要因で随意に倒置が選択された場合と考えられ、主語倒置の主要な目的は主語の焦点化であると見られる。

#### 4. 結論

広い意味での主語倒置は今回の資料を見る限り、スペイン語よりもフラ

ンス語で多く見られる。フランス語は主語代名詞の表示が義務的である代名詞主語強制（非省略）型の言語であるため、代名詞主語を持つ疑問文と伝達節で主語倒置が起き易いのに対し、代名詞非強制（省略）型のスペイン語では代名詞は陰在（非表示）となることが倒置の少ない一つの原因である。

主語の非主題化、焦点化を特徴とする主語後置構文は、フランス語ではやはり文法的な主語 *ce, il* を文頭（動詞前）に置き、動詞後に論理的主語を置く構造をとるのに対し、スペイン語では論理的主語（かつ文法的な主語）のみを動詞後に置く構造をとる。連結動詞の構文は両言語ともそれほど出現数に差はないが、それ以外の動詞の主語後置文の場合、スペイン語の頻度が非常に高いのはフランス語よりもこの構文を構成する心理動詞・評価動詞の種類が多様だからである。

どちらの言語でも無標の倒置、つまり狭義の主語倒置は統語的要因または情報的要因などいくつかの誘因によって常用的にまたは臨時的に引き起こされるとみられる。統語的環境に左右されない臨時的倒置に関してはフランス語ではSVの基本語順を維持しようとする統語的な制約が強く働くため、スペイン語よりも主語倒置は起こりにくいと思われる。口語またはそれに近い文体では、その傾向はさらに強まると考えられる。これに比べると、スペイン語は情報的または文体的要因により主語倒置を随意に選択する余地がフランス語よりは大きいと考えられる。

今回取り上げたのは主語倒置の問題に限られるが、スペイン語は語順の自由度が相対的に高いという冒頭に示した拙著の記述は、かなりの程度裏付けることができたと考える。

\*小論は同じ題目で東京スペイン語学研究会（東京外国語大学、2004年11月27日）において口頭発表した草稿を増補・改訂したものである。

#### 注

- 1) たとえば、Kayne y Pollok (2001: 107) は「他の多くのロマンス語と異なり、フランス語は限られた文の類型にしか動詞後の主語をとることを許容しない」と述べている。
- 2) たとえば、比較的古い研究では Kayne y Pollock (1978), Torrego (1984), 新しいものでは Kayne y Pollock (2001), Kampers-Manhe et al. (2003), Metcalf

(2003) など。変形文法によるロマンス語の倒置研究は特定の問題、とりわけ *wh* 疑問文における倒置派生の問題などに集中する傾向が見られる。

- 3) Hulk y Pollock (2001: 4) は単純倒置を *stylistic inversion* (文体的倒置)、複合倒置を *subject clitic inversion* (主語接語倒置) と呼んでいる。
- 4) 文例末のかっこ内の数字は Saint-Éupery (1946) とそのスペイン語訳のそれぞれ章とページを示す。また述語動詞および属詞の主要部には下線を付す。以下同じ。
- 5) ここでは便宜的に「代名詞省略」とか「空主語」という用語を借用しているが、このような仮説を容認するわけではない。言語類型論的に言えば、世界の言語の中で英語・フランス語のように主語代名詞の表示が義務的な言語はむしろ例外的である。こちらは「代名詞強制言語 (*pro-forced language*)」とでも呼ぶべきであろう。スペイン語など多くの言語にとっては、ここで言う類の *pro* を仮定する必要性があるとは思われない。こちらの型は「代名詞非強制言語 (*pro-unforced language*)」とでも呼ぶべきであろう。
- 6) *Pro* は文法的主語の代名詞を表す。なお、フランス語で疑問文を導く “*est-ce que ... ?*” の形式があり、それ自体 *ce* が倒置した形式と言えるが、疑問文を構成するための定型表現であるから、これを含む文は倒置の事例とは見なさない。
- 7) フランス語の全体疑問文 (疑問詞のない疑問文) には次の 3 つのタイプがあり、(a) から (c) の順序でより口語的な文体になると言われる。
  - a. *Parlez-vous français ?* / b. *Est-ce que vous parlez français ?* / c. *Vous parlez français ?*
 今回の資料で全体疑問文の例が少ないのは、多くは倒置を含まない (b) または (c) 型で表現されているからである。
- 8) スペイン語およびロマンス語の非対格動詞については Mendikoetxea (1999) 参照。
- 9) *estar* もこの種の構文を作るが、今回の資料には現れない。
- 10) フランス語の部分疑問文には 3 種類のスタイルがあり、下記の (a) から (c) の順序でより口語的になるとされる。
  - a. *Quand vient-il ?* / b. *Quand est-ce qu'il vient ?* / c. *Il vient quand ?*
 (c) のように疑問詞が文頭に配置されない場合、主語倒置も生じない。また、疑問詞が文頭にあっても (b) 型では倒置が生じない。(c) 型は、今回の資料では考察対象としなかった不定詞構文に 1 例だけ見られる。
 

— *Attendre quoi ?* (6, 30) [— *¿Esperar qué ?* (6, 31)]
- 11) この場合のみを文体的倒置と呼ぶのがむしろ適当かもしれない。

## 調査資料

- Saint-Exupéry, Antoine de (1999). *Le petit prince*, Paris: Gallimard (vers. original: Paris, 1946).
- (1976). *El principito*, trad. por Bonifacio del Carril, Tokio: Yohan (vers. original: Buenos Aires, 1951).

## 参考文献

- 朝倉季雄 (1955) 『フランス文法事典』 白水社.
- Hulk, Aafke y Pollock, Jean-Yves (2001). *Subject Inversion in Romance and the Theory of Universal Grammar*, Oxford: Oxford U.P.
- Kampers-Manhe, B., Marandin, J-M., Drijkoningen, F., Doetjes, J. y Hulk, A. (2003). "Subject NP Inversion," en F. Corblin y H. de Suart (eds.), *Handbook of French Semantics*, CSLI Publications, 553-580.
- Kayne, Richard y Pollock Jean-Yves (1978). "Stylistic Inversion, Successive Cyclicity, and Move in French," *Linguistic Inquiry* 9: 595-621.
- Kayne, Richard y Pollock Jean-Yves (2001). "New Thoughts on Stylistic Inversion," en A. Hulk y J-Y. Pollock (2001), §5: 107-161.
- Mendikoetxea, Amaya (1999). "Construcciones inacusativas y pasivas," en Bosque, I. y Demonte, V. (1999), *Gramática descriptiva del la lengua española*, RAE, Madrid: Espasa Calpe, §25, 1575-1629.
- Metcalf, Vanessa (2003). *Spanish Subject Inversion: an HPSG Account of Obligatoriness and Word Order*, Ohio State Univ.
- 佐藤房吉他 (1991) 『詳解フランス語文典』 駿河台出版社.
- 寺崎英樹 (1987) 「スペイン語の不定名詞句主語の語順について」『東京外国語大学論集』 37, 114-127.
- (1998) 『スペイン語文法の構造』 大学書林.
- Torrego, Esther (1984). "On Inversion in Spanish and Some of Its Effects," *Linguistic Inquiry* 15, 103-129.

表 1. フランス語の主語倒置構文

[1] 疑問文	[1a] 単純倒置	54	64
	[1b] 複合倒置	10	
[2] 間接疑問節			3
[3] 関係節			1
[4] 感嘆文			3
[5] 挿入節 (伝達節)			216
[6] 従属節	[6a] 自動詞	1	1
	[6b] 他動詞	—	
[7] 副詞句 / 節 + 自動詞			6
[8] 副詞句 / 節 + 他動詞			2
[9] 主節の自動詞			2
[10] 主節の他動詞			—
[11] c'est 構文	[11a] c'est + 属詞 + que 節 / de + 不定詞	6	13
	[11b] c'est + 属詞 + 名詞 / 代名詞	5	
	[11c] c'est + 名詞 / 代名詞	2	
[12] il 構文	[12a] être + 属詞 + que 節 / (de) + 不定詞	7	35
	[12b] falloir + 名詞 / 不定詞 / que 節	17	
	[12c] suffire + de + 不定詞	2	
	[12d] arriver + que 節 / de + 不定詞	3	
	[12e] exister + 名詞	2	
	[12f] その他動詞	4	
計			346

表 2. スペイン語の主語倒置構文

[1] 疑問文 (単純倒置)			33
[2] 間接疑問節			3
[3] 関係節			1
[4] 感嘆文			—
[5] 挿入節 (伝達節)			176
[6] 従属節	[6a] 自動詞	4	6
	[6b] 他動詞	2	
[7] 副詞句 / 節 + 自動詞			11
[8] 副詞句 / 節 + 他動詞			—
[9] 主節の自動詞	[9a] gustar	9	24
	[9b] 評価動詞	3	
	[9c] 提示動詞	4	
	[9d] parecer	6	
	[9e] estar (存在)	1	
	[9f] rugir	1	
[10] 主節の他動詞	[10a] 心理動詞	7	8
	[10b] hacer falta	1	
[11] ser 構文	[11a] ser + 属詞 + que 節 / 不定詞	22	35
	[11b] 属詞 + ser + 名詞 / que 節	4	
	[11c] ser + 属詞 + 名詞	8	
	[11d] ser 受動文	1	
[12] se 受動文			18
[13] 再帰動詞 (代名動詞) 文			2
計			317

To make a contrastive study of the subject inversion of French and Spanish this paper compares the original French text of A. Saint-Exupery, *Le Petit Prince* (1946) with its Spanish version, B. del Carril, *El Principito* (1951). The data show that the inversion in its broad sense is more frequent in French than in Spanish. It is owing mainly to the fact that many cases of the subject clitic inversion in French are converted to the sentences without an explicit pronoun subject in Spanish. The inversion cases in these languages are classified into the unmarked inversion and the marked inversion. The unmarked inversion cases are divided into two types: postverbal subject constructions formed by psychological or comment verbs and formula expressions formed by copulative verbs with a subject in postposition or extraposition. The marked inversion cases are separated into the usual inversion and the occasional inversion. The latter is triggered optionally by informational or stylistic factors. Spanish gives occasional inversions more frequently than French.